第２学年Ａ組　国語科授業案

場　所　２Ａ教室
授業者　小柳津清千

１　単　元　　わたしのそばにも（他者とのつながりを考える）

２　単元の構想

（１）本単元で目ざす子どもの姿

「青いエグジット」と出会った子どもは、わがまま放題であった清人が、なぜダイビングで前向きな生き方をするようになったのか本文を読み返す。小説の技法に触れながら、清人や父親の変容の理由を見つけた子どもは、小説と同じような場面が自分たちの生活の中にもあることに気づいていく

（２）本単元で獲得させたい力

子どもは、昨年度行った「読み方は一つではない」の単元で「デューク」（江國香織）を読んだ。単元の学習において、作品が作者によって計算されて書かれたものであり、いくつもの伏線が存在することを見つけることができた。この学習により、文学作品をただ読むだけでなく、文学作品を構成する要素について捉える力を高めることができた。

「青いエグジット」（石田衣良）は、ファンタジーの要素を含んだ「デューク」と比べると、主人公の清人がニートであったり、父親が会社でリストラされそうな存在であることなど、より現実的な内容で書かれている。しかし、題名やダイビング、海の青さなどには、日常生活にあるできごとが象徴的に描かれている。これらが何を象徴しているのか、作者がどのような意図をもってこれらの要素を選んでいるのかを考える。何度も本文や資料を読み返しながら追究したり、作品の表現について自分で実際に確かめてみたりすることで、子どもは作品に描かれていることが自分たちの日常生活にもあるできごとだと気づくだろう。子どもは、他の作品についても、作品を構成する要素を探したり、実際に自分で表現について確かめたりしながら読むようになる。

（３）はたらきかけと「学んだこと」を行動につなげる子どもの姿

まず、自力では復帰が難しいとされるニートに対する支援する施設を公的機関が立ち上げるという新聞記事を紹介し、ニートについて自分がどのように考えているのかを意識させた上で「青いエグジット」を読む。そうすることで、多くの子どもが清人の変化について意識を向けるであろう。感想交流を行うことで、子どもは「何が清人を変えたのか」という点について知りたくなり、本文を読み返し、清人の言動について分析し始める。

さらに、清人の変化に大きな影響を与えているのが父親であることに気づいた子どもは、父親とその行動を肯定的に考えるであろう。しかし、清人にわがまま放題をさせている部分から、「本当にこの父親の子育てはよいのか」と考えるＡ男の意見を紹介する。父親の生き方の是非について考え始めた子どもは、父親の行動を時系列で整理し直したり、自身の生活を捨てているかのような部分から父親の生き方を説明し直したりし始めるだろう。また、石田氏の作品には、清人のような少年が登場する作品が多いことから、清人や父親の生き方が象徴していることについて追究するであろう。そうする中で、子どもは、作者が身のまわりにあることをかなり強調して作品に登場させていることに気づき作者がこの作品に込めたメッセージについて考えていく。

単元の後半では、ダイビングについて清人が語っている部分に着目し、ダイビングがどのようなものなのか、プールで水中の感覚を確かめながら清人の表現と比較していく。小説などの作品に表されている表現が、自分のすぐそばの生活にもあるのだということに気づき、表現について自分で確かめてみようとするようになる。

3　本時の構想（12/13）

作品には作者のメッセージが隠されているということに気づいた子どもは、「青いエグジット」に込められた作者のメッセージについて追究し、「苦しくても必ず立ち直ることができる」という思いが作品に込められていることがわかった。

第９時で作者からのメッセージについて考えた子どもは、そのときに何度も出てくるダイビングということばに再び着目し、清人が語っているダイビングの表現はどのような感覚なのかと考え、第10時にプールで水中の間隔を確かめた。本時は、その時確かめた感覚と、清人が表現した言葉を比較しながら、ダイビングのもつ特性について考える。「素晴らしく美しい世界」「青い出口」といった表現が、実際にはどのような感覚から表現されているのか、子どもは自分の感覚と重ね合わせながら考えていく。さらに、テキストの59ページを境として、清人がダイビングを始める前後の世界と、水中と水の外の世界を比較して、考えていく。単元の前半では、ダイビングについての表現を言葉だけで捉えていたが、表現と実際の体験を比較して考えることで、自分のすぐそばにあることに気づいていく。

はたらきかけ	思い・考え　「学んだこと」　子どもの行動
①考えの吟味 **清人の表現と各自の感じたことを比較して考えることができるように、清人の台詞と自問の視点「再現できるか」を黒板に掲示する**	清人の語るダイビングについての言葉は、正確な表現なのだろうか ① 確かに足のハンディは全く感じない世界だ 体重がかからない分だけ自由な感じがする 動きはゆっくりになるけれど心が落ち着く 水面は別の世界への出口だという感じがした 水中に光が差し込むと美しく感じる 水面から外に出る瞬間は何も見えなくなる 水の中の物を拾うのはなかなか難しい 水の中では会話ができないので孤独な感じだ ハンドサインを決めておくことで会話できる 清人がダイビングを始める前後の世界と、ダイビングの場面に出てくる水中と外の世界は、同じ性質をもっているのではないだろうか 【以前の清人の世界】 「希望のない世界」とは、水中から抜け出せない状態のことだ 水中は重さからは自由になるけれど動きにくさはすごくある 以前の清人はずっと水の底にいるような感じだったのだろう 【現在の清人の世界】 重力からも解放され、自由に動き回ることのできる世界 両親のことを考えるだけの余裕が海底でもあった 離れたところにいる人のことも思う優しさが戻ってきた 作品に描かれていることは、自分たちの日常生活の中にたくさんあるぞ 自分たちが生活で感じることを言葉で表現し始める

4　単元構想表（13時間完了）

【第９時終了時】

主なはたらきかけ	思い・考え　「学んだこと」　子どもの行動	国語科で重視する力
○認識を揺さぶる 清人の立ち直りについて意識を向けさせるために、ニートを取り巻く現状について考えさせたうえで「青いエグジット」（石田衣良）と出会わせる	弟や妹はわがままだと思う 普段あまり我慢ことはない 清人が立ち直ることができたのはなぜだろう　１～２時 ニートから抜け出すことは難しい 父親に対する言葉遣いが優しくなった わがままだった清人が明るくなった 清人が明るく前向きに変化していることはわかった。しかし、清人がダイビングにここまで夢中になったのはなぜなのだろうか **ダイビングが清人に与えた影響について追究する** ３～５時	**☆捉える力** ・本文中の清人の言動に着目することで、何が清人を立ち直らせたのかを分析する
○問題の焦点化 父親の生き方について意識を向けさせるために、父親の生き方に関して疑問を感じているＡ男を指名し、発言させる	足がなくても体が自由に動かせるからだ ポスターを見たのが衝撃的だった 清人を信じる謙太郎の存在が大きい 清人は普通の人と同じ生活をしたかった これまでの４年間が苦しかった反動だ 謙太郎は清人を甘やかしすぎている ダイビングや両親の愛情が清人を前向きにさせたのだ。登場人物が極端すぎる性格なのはなぜだろう **作者が作品に込めたメッセージについて追究する** ６～９時	**☆練り上げる力** ・ダイビングが清人に与えた影響について、仲間と意見交流をする中で考えを深める
○考えを吟味する 清人や父親の言動について見直させるために、自問の視点「再現することは可能か」を示して、実際にプールで泳いで清人の表現していることが自分でも再現することができるか確かめる	作者は中高生の物語を多く書いている 題名にはどのような意味があるのだろう どんな人でも必ず明るい明日が来る 主人公が挫折から立ち直る作品が多い 子どもも大人も苦しくても出口はある やっぱりダイビングの影響が大きいな 石田氏は「苦しくても必ず立ち直ることができる」というメッセージを送っている。ダイビングにはどんな力があるのだろうか **実際にプールで泳ぎ、ダイビングの表現を確かめてみる** 10～13時（本時12） 出口で別の世界に移る感覚がある 水中は「素晴らしく美しい」感じだ 肺の中の空気を調整している 清人が語っていたダイビングに関することは、実際に肌で感じることができた。感覚を言葉で表現するのは楽しいな 自分の感覚を言葉で表現し始める	**☆表現する力** ・自分の感覚で感じ取った物事と作品中の表現を比較して、どのように表現するのがよいのかを考える
	石田氏の書いた他の小説も読んで、そのメッセージを考えたい これまで読んだ作品の表現も自分で確かめてみたい	